

北陸地方の様相

吉岡康暢

1. 平安期と土器編年
2. 画期の設定と暦年代
3. 施釉陶の問題
4. 中世窯成立の前提

《発表》

北陸地方は、一般に新潟から福井まで、四県七ヶ国を含みますが、今回は、主としてその西部の中間にあります加賀・能登を中心に、一部越前・越中の範囲で紹介したいと思います。

奈良・平安期の土器編年は、現在、大きくⅤ期に区分できると思います。第1図(本書P35)須恵器略編年表をごらん下さい。Ⅰ期は、奈良時代・8世紀代です。Ⅱ期以降が、今回問題の平安時代ですが、Ⅱ-1、Ⅱ-2期と分けられ、Ⅱ-1期が大体9世紀の前半代、Ⅱ-2期が9世紀の後半、あるいは、後半でもかなり終りに近い頃から10世紀前半代と考えています。Ⅱ期とⅢ期との間には一つの大きな画期を設定したいと思います。画期の接点のところを、先ほどの関東とも関連させて、950年ぐらいのところへ行かないだろうかと考えています。もちろん、これは巾をもたせての構想であります。Ⅲ期と致しましたのは、従って10世紀後半代となります。それから以後は、須恵器の窯が現在、確認されていないので、もう一枚の第2図(本書P37)の土師器の方をごらん下さい。土師器の中でも、黒色の土師器、それから図化していませんが、いわゆる丹塗土師器、それから搬入された施釉陶として、緑釉・灰釉、それに一部輸入陶器(中国陶器)が基本セットとなるⅣ期は、11世紀の前半代です。第Ⅳ期と第Ⅴ期との間に、第2の大きな画期、すなわち線引きをしておきたいと思います。それを大体1100年の目安で考えているわけです。ただし、11世紀後半代につきましては、まだ実態が掌握されておりませんので、この第2の画期は、1100年というラインから、もう少し上の方へ、それが11世紀の中葉をさかのぼるといふことは考えにくいと思いますが、押し上がるという可能性を、今後の資料の検出状態で考慮していくべきだろうと思います。

そこで、図表の説明に入ります。

第1図(本書P35)の須恵器の方からまいります。

第Ⅰ期の北陸における使用形態をみますと、供膳・貯蔵器は須恵器、煮沸器は土師器という、全国でも稀な器種による機能分化が貫徹した地域であり、その原理がきっちり守られているのがこの8世紀代、いい換えれば、須恵器生産のピークといえるかと思えます。そこで、北陸の特色として器種構成に若干ふれますと、例えば、畿内の影響下にあるといえますけれども、図の中の長甕・鍋類と一括した項の中には図化していませんが、長甕をもう少し圧縮した小甕が必ず器種構成に入ってきます。とにかく、こうした甕・鍋・甑といった煮沸セット(土師器)を7世紀後半代から須恵器の窯で焼いています。そして、長甕あるいは鍋類の成形技法をみますと、上胴は紐轆轆成形後、多くはカキ目状調整で仕上げ、下胴は須恵器と同様のタタキ成形という特徴的なものです。

Ⅱ-1期になりますと、奈良時代の畿内の影響下か離脱して、北陸の平安朝様式ともいえる、器種の更新が一斉に現われてきます。例えば、高杯はⅡ-1期でなくなります。(残っていても

非常にわずかです。)これは東海地方などにも共通する面であります。反面、第1図で瓶類と便宜的に分けましたうちA欄に掲げた有台の長頸瓶—8世紀前半代には、横瓶などとともに、瓶類の主体をなして焼造されていましたが—がここで消滅します。これにかわって、図中、瓶類Aの左に№41としました、フラスコ型の器体に細長い頸をとりつける形となります。現象的にみますと、「猿投窯展」で展示されています長頸瓶に非常によく似ています。あるいは、猿投窯製品の写しといった点も考慮する必要があるかも知れません。そのほか、北陸で固有の器種として周知されている瓶類E欄に入れました№43の双耳瓶—これは8世紀後半代頃まではさかのぼる可能性があります—は、やはり平安朝様式という大づかみな流れのなかで、一貫してとらえることができます。№44の有台肩衝壺—これは、前代にもありますが—、壺類A類におきました№39のいわゆる葉壺(有台短頸壺)を含めまして、この4つのもが壺・瓶の中では最大公約数的な器種として、各窯に共通してみられます。

技法的な面に若干ふれますと、例えば問題になっています回転糸切りは、8世紀初頭から鉄鉢形—先の尖ったものは北陸地方にはありませんが—の平底のもの、あるいは図の鉢類の№7といった特定の器種、それから瓶類のH・I類としました№30(これはI—2期ですが)の小壺といった特定の器種の一部に限って回転糸切りが認められます。普遍化するのには、後に述べますように、Ⅲ期になってからです。ところが、この技法について、第2図(本書P37)の土師器の方で見ると、小形の甕類—かなり量産化されていますが—が、この時期になって、尖底あるいは丸底から平底へ器形が移行します。平底化に伴って「ロクロ土師」という性格が一段と鮮明化し、回転糸切りにほぼ統一されるという現象があります。土師器の碗・皿類は、加賀・能登では確認されていませんが、北陸西部の東寄りの越中では、9世紀の前半代には土師器の碗・皿類が一定の%を占めるとみられています。但し、量的な面まで厳密にとらえきっていません。

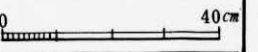
ところで、先に東海地方との関係を述べましたが、黒色土師器、これがⅡ—1期の加賀・能登では供膳器の中で10%ぐらいでしょうか、とにかく一定量を占めるようになります。器種としては、碗・皿類がありますが、今のところ、有台の皿は見当りません。有台の碗などは、従来の器形の系譜から生まれたというよりも、体部の器形や高い高台からみますと、忠実には模作していませんが、施釉陶をある程度意識しているのではないかと思います。

なお、黒色土師器と別に、図化していませんが、丹塗土師器の一群が、少量必ず伴っています。この両者は、5世紀代の終り頃から延々と北陸では作り続けられています。それがセット関係の中で、かなり目立つようになるのは、8世紀代です。この時期には、丹塗土師器は、黒色土師器のような一般の供膳器の形態ではなく、8世紀代前半代には、あきらかに「佐波理」写しと思われるものがありますし、Ⅱ—1期のもので八角形の面取りをした平安京出土の模作品といっているものもあります。それから須恵器の蓋とか、有台の盤、杯、高杯といったようなものを写したものがあって、黒色土師器とは性格を異にしています。おそらく、祭祀的な場で使用されたのではないかと推測しています。

施釉陶の相伴関係については、現在のところやや幅をもたせても石川県横江庄遺跡1例であって、緑釉陶器の碗の底部1点、灰釉陶は平瓶の破片が出土していて、檜崎先生のご意見では、0—10期からIG—78期ぐらいのところへいくのではないかとということです。こういった関係と、もう一つ注目しておきたいのは、暦年代の大づかみな抑えとして使いたい第2図右端の№8の焼台があります。こういう頸部がやゝ収縮して平底になった特徴的な焼台がⅡ—1期の窯から少数であ

	坏・碗類	盤・高坏類	鉢類		壺類		瓶類					長頸・鍋類		
			A・B	C・D	A	B	B	A	C・D	E	F・G	H・I	A	B・C
700 春木三号窯 若緑三号窯	1 2 3	4 5 6	7	8 9	10	11		12	13 14		15		16	17
I 750 箱宮五号窯 浅川一号窯	18 19 20	21 22 23		24	25	26		27	28	29		30	31	32
800 戸津五号窯 黒川二号窯	33 34 35	36	37	38	39	40	41 42			43 44			45	46 47
II 850 池崎 洲衛一号窯 給分 小袋窯	48 49 50	51 52		53	54		55	56 57	58	59			60	61 62
900 III 戸津四号窯 戸津 三号窯	63 64 65	66 67 68	69	70	71 72	73	74	75	76	77		78	79	80

第 1 図 須惠器略編年図



	土 師 器		施 釉 陶 器		曆 年 代
	土 師 器	黒色土師器	緑釉陶器	灰釉陶器	
Ⅱ ₁ 石川・横江庄(1~3)、福井・上河北					1. 石川・松任市横江庄遺跡(庄家跡・捨場)弘仁9年(816)立庄東大寺領庄園 2. 平城京SD 650A 双耳瓶 I ₂ 3. 烧台 I ₁ ~Ⅲ
Ⅱ ₂ 石川・富山(じょうべのま(15~18))、戸水C(SD 27)、下安原(4~11)、寺家					1. SD 650B 双耳瓶 II ₂ 2. 滋賀・高島町鴨遺跡貞観15年(873)木簡北陸型土師器(小甕)
Ⅲ 石川(古府)のま(19~21)、福井(下河端)のま(22~24)、宮地、安養寺					1. 福井・鯖江市下河端遺跡「庚戌」墨書坏(寛平2(890)、天曆4(950)、寛弘7(1010)、延久2(1070))
Ⅳ 石川(三浦)上層(25~39)、上林SK 7:8					
Ⅴ 石川(小塩)田尻(40~51)、寺家					1. 平安京左京4条1坊寛治5年(1091)墨書碗中国陶磁セット 40~51 拠・田嶋明人原図

第 2 図 土師器編年図

りますが、使用例が普遍的にみられます。楯崎先生に伺ったところ、IG-78窯式に初現するといわれています。

こうしたことを念頭において、もう一つ共伴関係の資料を挙げます。巽淳一郎さんの資料を使わせてもらいますが、図版10（本書P105、第4図）のSD650A（平城宮）の一括資料のうち№410と思いますが、北陸の特徴的な双耳瓶の口頸部を欠いたものが出土しています。これは、越前なり、北陸方面から搬入されたものと考えられ、Ⅱ-1期の双耳瓶のタイプであります。

それから暦年代の根拠としてはやや厳密性を欠くかと思いますが、第2図（本書P37）右欄にメモしたように石川県・横江庄遺跡は、弘仁9年（818年）に東大寺領庄園として立庄していますが、この庄域の溝あるいは柱穴といった遺構と、それに付属するとみられるやゝ性格が不明な大量に土器群を遺棄している捨場からの一括資料を基準にしますと、818年を上限として、主体的な土器は850年をそれほど下がらないと思います。

Ⅱ-2期になるとそれがどう変化するかといいますと、第1図にもどりますが、これは年代の巾を広くとってありますので、須恵器の窯では3つぐらいの時期に区分できます。まず現われるのは、土師器を模作した高台の高い№51のような有台の碗が極く少量であります。窯で焼かれ出します。それ以外には、須恵器については器種構成の変化はなく、みるべきものは少ないようです。一方、土師器はⅡ-2期に供膳器の中でかなりの%を占めてきます。例えば石川県・下安原遺跡の一括資料の%は、須恵器が50%、土師器が22%、黒色土師器が29%という数字です。したがって、消費地では、供膳器の約半数は須恵器、半数は土師器で、そのうちの半数ないしそれをやゝ上まわる量で黒色土師器が急増しています。これが黒色土師器の一番多い時期です。さらに黒色土師器を含めて土師器について見てみますと、土師器には有台皿が出現するようです。しかし、依然として、Ⅱ-1期と同じように第2図（本書P37）№5の碗というべきか鉢とすべきか、やゝ大ぶりなものがあります。黒色土師器にも№9に示したような、図だけからは、杯といった方がいいような器種がみられ、碗・皿に集約されておらず、かなりバラエティがみられるという点では、Ⅱ-1期の器種構成を継承しています。但し、Ⅱ-1期の黒色土師器は、糸切り後、底面から底側面は、非常に入念な削り調整が施されるという特色をもっています。しかし、この時期になりますと、ごく一部を除き、ほとんど糸切りをそのまま残しています。但し、糸切りを削ったりあるいは、ごく稀にヘラ切りもまだ残ります。

丹塗土師器は、黒色土師器と性格が似てきます。つまり、供膳器の一部と器形を共有するようになるわけです。

施釉陶器の確実な共伴例は少ないようです。Ⅱ-2期でも大体9世紀の終りから10世紀へかかるかなという風に、やゝ巾をもたせて考えている富山県・じょうべのま遺跡から出土した緑釉（№15）、あるいは灰釉（№16, 17, 18）があります。形式的には単一でなく複雑であります。両面ハケ塗りの痕跡を残していてK-90窯式と認定されたものもあります。

緑釉と灰釉の関係については、北陸では一貫して量的には緑釉が灰釉を上まわっています。特にこの時期になりますと、石川県・戸水C遺跡のように大形の掘立柱建物が発見されて、官的な性格をおびていると思われる個所で数十点を単位とするように、集中的に検出されたりしています。№13, 14がその一例ですが、花鳥陰刻文風の皿、唾壺、香炉、平瓶といった器種も確認されています。産地については断定できませんが、平安京周辺で焼かれたと思われるものが多いよ

うです。東海のものも花鳥陰刻文に象徴されるように、上質な製品が確実に持ちこまれています。

Ⅱ-2期の暦年代は、SD 650 B 中層（平城宮）で、正報告書中には載っていませんが、やはり双耳瓶のⅡ-2期タイプのものが伴出しています。また、直接的資料ではありませんが滋賀県鴨遺跡で、貞観15年（873年）銘木簡に伴う一括資料とされているものの中に、北陸系の小形甕類が一定量検出されています。こうしたことから、Ⅱ-2期の一点が9世紀の末葉におかれることが傍証されると思います。

以上述べてきました須恵器と土師器の原則的な相互関係が、Ⅱ期の間は、量的変化をみせながら保たれていますが、Ⅲ期に入るとかなり様相が変わります。

須恵器は、品質が胎土、焼成とも低下し、第1図（本書P35）№64のように蓋はあるが鈕がすべて省略されるというように、須恵器生産の衰退を感じさせます。事実、窯も中核的な窯跡群でも特定の地区に偏在するということが明らかになっています。同時に注目しておきたいのは、№66, 67, 68の内面には、須恵器通有のおさえ込み轆轤成形の特徴をもたず、平滑に内底から口縁端部に反り上がる、土師器特有の器形を写した椀と皿が、大量に須恵器窯で焼かれていることです。これらの底面は、すべて回転糸切り・不調整。これに対して須恵器の系譜をひく杯・皿類は、すべてヘラ切りという明瞭な作り分けが行われています。その他№70のような鉢類が目立って多くなります。また、№77のような口頸部がラッパ状に肥大し、なで肩になった双耳瓶が量産されるようになります。№78のような施釉陶器を写したと思われる小瓶、耳皿といったものがこの時期には焼かれています。

先ほどの須恵器系の杯・皿と、土師器を模作したと思われる椀・皿の%を見てみますと、Ⅲ期前半の戸津4号窯では、大略1:1の比率であります。後半の戸津3号窯では、1.4:4の比率でした。従いまして、土師器系統の方が、須恵器の窯でも器形的には、圧倒的に大きな影響力をもつようになっています。双耳瓶は、（戸津）3号窯の壺・瓶類の総数355点中、55個体あり全体の約15%を占め、壺・瓶類では異常に高い量比を示しています。こうした現象は須恵器生産がこの段階に、かなり特定地区に集約しながら、絶対量では減産の方向へむかうことを示しています。このことは、Ⅲ期の土師器でも明瞭に裏付けられます。Ⅲ期には、土師器は、椀・皿類のすべてが回転糸切りとなりますが、一部に削りの手法を残しています。黒色土師器は作りが丁寧で大形品を含みますが、基本的に同様であります。第2図（本書P37）№23は、外面丹塗りですが、北陸では、外面丹塗り、内面黒色という、丹塗黒色土師器と呼ぶ独特のものが、古墳時代以降越中・加賀で、一定量作られています。

さて、Ⅲ期の暦年代であります。明瞭な傍証資料はありませんが、福井県・下河端遺跡で、「庚戌」と読まれている墨書銘の杯が出土していて、報告書では、延久2年（1070）にあてられています。上・下限の問題から編年的に操作してみますと、天曆4年（950）あたりにくるかと思います。

このように須恵器が消費地で減少の一途をたどる傾向は、Ⅳ期に決定的となります。Ⅳ期以降は、第2図の土師器の資料のみで説明します。

Ⅲ期を代表する石川県・安養寺71号土壇では、須恵器が20%、土師器が60%、黒色土師器20%と須恵器の使用量が目立って減ってきていますが、Ⅳ期の三浦上層遺跡では、須恵器2%、土師

器95%、黒色土師器3%（いずれも供膳器のみ）となり、須恵器のほか黒色土師器も量的には少なくなっています。Ⅱ-2期からのこうした方向性は、Ⅳ期で完結するとみることができます。この時期には、ロクロ成形後未調整のまま、回転糸切り・切り離しの状態です。器種構成のうえでは、土師器で第2図の№28のような小皿（小形皿）類があらわれるのが一つの特徴です。丹塗土師器はごく少量しか出土していません。施釉陶器は、№32~39（三浦上層遺跡の包含層的な状態で出土したもの）が一応共伴した一括であります。緑釉陶器№32~34は、高台の内面が有段になったものや、薄く高い近江独特の外底面に回転糸切りをそのまま残すものです。№35は寺島氏（平安博物館）にみていただき、また出光美術館の資料と比較しますと、京都・小塩窯あたりのものと見られます。№36以下の灰釉陶器は、江崎氏（一宮市）やこちらの人に見てもらおうとほとんど、東濃のものということです。その他この期に共伴するものは、ほぼ0-53窯式期と認定されます。この時期には、須恵器の窯は確認されていませんが、消費地ではどうだったのかを見てみると、器種として甕が大量に出土しているほか、第1図壺B類№74と類似の器形の壺類が一定量出土しています。その他ごくわずかな瓶があるのみで、三浦上層遺跡では須恵器の確実な杯類は皆無です。このように、甕と壺に器種が集約された状態がうかがえます。甕類は、横山先生のお仕事にヒントを得て検索してみますと、叩きの原体が木目と平行の、従って現象的には木目の縞が叩きの溝との間に現われないものが三浦上層遺跡では30%前後あるようで、非常に多くなってきています。ご存知のように、珠洲は木目と平行一色であって、そういう点ではⅣ期の叩きは現象的には中世的であります。また、内面の叩きを受ける押圧痕の中で、北陸で長足状とか、花文状とかいっている東北地方にもよく見うけられるものとか、簾状の押圧とか、一見、亀山焼の内面にあるようなきめ細かいリングが走っている叩きとかいう、特徴的なものも現われてきています。と同時に、内面の押圧痕を磨り消したり、刷毛状のものでなでつけたりしています。珠洲には、初期の一部を除いて、内面に同心円状の押圧痕をもつものはありません。また、器形的には、平底の甕がこの期に出現します。こうしたことと、器種の組合わせを考慮しますと、中世窯への一定の傾斜が11世紀前半頃に考えている須恵器にみられるわけです。

Ⅴ期の須恵器は、現在のところ資料が非常に少なく、それも貯蔵器に限られています。近年調査されました、石川県・小塩^{おしほ}辻^{つじ}田尻^{たじり}遺跡のSD01遺構から一括検出された資料をみますと、甕類が目立ちます。この甕類は、2群に分けられまして、1群は須恵器であり、もう1群は中世陶であります。須恵器は、Ⅳ期と%はちがいますが、いろいろな押圧痕をもち、胎土や焼きにもばらつきが目立つところから、複数の生産地から寄せ集められた状態を示しています。また、形の上では、香川県の十瓶窯に類似の、やゝ長方形の格子叩きを施し、内面をかき削るクセを持つ中世陶が一定量出土しています。

土師器も、須恵器甕類のバラエティに対応するかのように、器種に変化があって、Ⅳ期にみられた法量的、形態的な規格性を喪失します。そして、黒色土師器がかなりの%をもって、復活、再生します。但し、有台のものに限定されます。これらは、すべて高い三角高台の底径指数の少ないものばかりであります。この中には、銀灰色の磨きをかけているものがありまして、西日本の瓦器碗との相互的な技術交流があった可能性があります。第2図№43の小皿は、うがちすぎかも知れませんが、中国陶磁の写しかと思われるほど似ています。

外から搬入されたものは、緑釉、灰釉は皆無であります。平安京左京4条1坊の寛治5年(1091)

銘の中国陶磁のセットに似ていると亀井明徳さんから指摘されました白磁の薄手、あるいは肥厚した玉縁の口縁をもった碗類に鍵の手状の文様をつけたものなどのセットが出土していて、ほぼ1100年前後を中心とした時期と思われる。

Ⅳ期からⅤ期の間を大きな画期としましたが、この画期といいますのは、Ⅱ-2期から始まりました古代末期への方向性とはまったく違った、むしろ中世の出発、そしてその始期は、もう少しさかのぼる可能性が大きいのですが、そういう点で、新しい器種のセット、組み合わせでもって構成されているといえます。それは、土師器と須恵器について述べましたように、流通機構が非常に不安定な状態、器種のいろいろなばらつき、バラエティにみられるような寄せ集めの、規格化されない—中世のカワラケとして統一されない—様相を示し、中世のやきものの生産地が地元はまだ出現していない不安定な流通状況を反映しているものと思われる。

こうした段階を経て、12世紀中葉前後に、越前・加賀・珠洲といった中世窯が一斉に出現してまいります。珠洲の場合も、こういった流通状況を前提に考えますと、おそらく、西日本の某地から搬入された須恵器系の中世陶によって、すなわち、外からの大きな刺激によってかなり突然的に能登半島の東北端に出現するのではないかと思います。したがって、瀬戸内地方で見通されているような、須恵器から中世への連続的な移行というあり方は、北陸では考えにくいという見通しを現在もっているわけであります。(発表以上)

— 質疑 —

(質問—榑崎彰一) 福井県武生市安養寺・光明山経塚から出土している双耳瓶は、標式的な窯から発見されていますか。

(吉岡) 今のところ窯の資料としましては、戸津3号窯からしか出土していません。戸津3号窯のタイプの中で包括できると思います。

(榑崎) ただ年代がそうすると……。

(吉岡) 従って、私は共伴物ではなくて、伝世的—共伴と認める場合には—と考えるか、まったく性格を異にするものか、つまり、年代の違うものが別々に出土したのか、そのいずれかと理解しています。

(榑崎) わかりました。

(吉岡) なお状況判断ではありますが、経塚でああいった形で須恵器が、何かの容れ物として経外容器以外に伴った例がないように記憶しています。

補注

本会で発表の機会を与えられた北陸の平安時代土器編年の詳細については、拙稿「奈良平安時代の土器編年」『東大寺横濱江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会(昭和58年)参照。